



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ウクライナの悲嘆

インド最良のわが輩にとって、ウクライナは遠い国であった。しかし、全く関心がなかったというわけではない。

最初の関心は、チェルノブイリ原発事故（1986）であった。これで一気に原発不信感が増した。さらにそれを補強したのが福島原発事故であった。

チェルノブイリ原発事故を丹念に取材し、写真集として発刊したのが『廃墟 チェルノブイリ』（二見書房）である。著者は中筋純、1966 年和歌山生れ、東京外大中国語学科在籍中より、海外を放浪、独学で写真技術を修得、出版社勤務をへて独立。幅広い分野で活動している。チェルノブイリの写真パネルは、要望があれば貸し出している。

その写真パネルの件を、電話で問い合わせたことがあったが、彼に会ったことはない。しかし、偶然にも彼に近い人が、わが輩の周りに三人もいた。一人は東京外大時代の友人、もう一人はバイク仲間である。

三人目が、わがミトラ城の準スタッフのナオちゃんである。ナオちゃんは、兄貴に劣らず優秀で、（わが後継者になってくれたら良いのに・・・）と秘かに思っていた人物である。

東京外大時代の友人は、後に個性的で優れたヨーガのマスター・インストラクターになった。かの友人がチェルノブイリや原発に特に関心があるとは思えない。そもそも現代ヨーガは、個人なレベルに停滞しているように、わが輩には思える。たとえば、私の健康法だとか、ヨーガをして汗をかくだとか、美しいプロポーションになるだとか、極めて私個人のレベルになっている。もちろん、わが輩はこれらを否定するつもりはない。それはそれで結構なことである。

そのような中であって、あえてヨーガの団体名はださないが、わが輩が以前から注目している活動がある。長年ウクライナでヨーガの指導をしている。チェルノブイリ原発被災者の免疫力をヨーガで高めることができるか、という価値ある利他的活動である。

このグループは再々ウクライナを訪れていた。キエフに渡航すると、欧州経路になる。それで航空運賃が高額になってしまう。リーダー的存在の一人・宝塚先生がわが輩に愚痴っぽく言った。

「ワIFEから、家計のことも考えて、と言われたんですよ」

家庭か利他か、思い悩むところである。ヨーガで何ができるか・・・。健康になり、心が静まった。さて、何をするか。

そんなときに、宝塚先生の悩みや善行を吹き飛ばしたのは、ロシア軍によるウクライナ侵攻である。

この団体はロシアの侵攻後、すぐさま支援金を募りドイツのNGOを通じて送金した。

朝日新聞（2022年3月16日）で、作家アンドレイ・クルコフの寄稿（ロシアが恥ずかしい。私たちは降伏しない。独立と自由は譲らず）を読んだ。この小説家の名前も知らず本を読んだこともないが、その中にヨーガ瞑想のことがでていたので、少なからず関心をもった。

クルコフの兄は妻ラリサとキエフで暮している。毎日電話で兄の安否を確認している。兄はヨーガと瞑想を実修しているので、日常神経質になったり、動揺することもない。

「そんな兄がきょうになって、妻とキエフを逃れたいと初めて口にした」

兄が積み上げてきた心の平安を一気にロシア軍は破壊し、死の不安に陥れた。それは同時にクルコフの苦しみであった。彼はレニングラードに生まれたロシア人だが、「ロシアには二度と行かない」と述べている。戦争は故郷と自由と心の平安を奪った。

われわれの若き時代は、反米が主流であった。アメリカは東京大空襲、大阪大空襲で焼夷弾を投下して民家を焼き払い数十万の市民を殺傷した。また広島や長崎に原爆を投下し、罪なき市民を殺戮した。その記憶が親世代から鮮明に引き継がれていた時代であった。その上に、アメリカはベトナム戦争まで始めた。沖縄が米軍出撃の基地になっていた。

そのころ恩師哲学者から、学生運動家は「なぜ、北方領土も問題にしないのか」と言われ、正直その問の意味が分からなかった。その当時、左翼は沖縄、右翼は北方領土という住み分けがあった。また、ソ連、マルクス主義に幻想を抱いていた時代であった、からかもしれない。

ソ連が1991年崩壊し、グローバル化した今日の地球上に、プーチンのような前世紀のサタンが顕われるとは思いたくなかったが、現われた。

プーチンの手下のラブロフ外相は「ウクライナを攻撃していない」と発言したのに驚いた。（攻撃しているのに攻撃していない）。まるで難解なインド論理学を駆使しているようだが、恥知らずの大嘘だ。

彼らが属するロシア正教にも、「地獄」の観念はあるだろう。どのような“正義”も、人を殺せば地獄に墮ちる。どんなに対立しても人を殺めてはならない。これが印度のアヒンサー（不殺生、非暴力）である。

わが敬愛するインドは、この人間の最高の律法をロシアに向けて発すべきであるが、どうも一歩遅れている。新聞の解説によると、ロシアから武器を供与されているからだと言われている。ロシアに“恩”を感じているのだろうか。わが輩の狭い見識では、印度に“恩”の観念はない、と思っている。もし、わが輩が正しいなら、ロシアに恩義など必要なく、すぐさまロシアのウクライナ侵攻を非難してほしい。

毎日テレビで流される侵攻被害、特に幼子たちの被害をみると痛ましい。わが輩はコロナ・ウイルスに感染した娘夫婦に代わって、二歳の孫娘の世話をしている。ウクライナの痛みを、孫娘とわが身に引き寄せると悲嘆が押し寄せて来る。現実のウクライナの苦しみは、その数百倍であろう。